

平成 29 年 1 月 27 日

## 読んで、「半七」！

半七捕物帳傑作選一

岡本綺堂

北村薫・宮部みゆき編 筑摩書房

担当 松井 滋 46 年法

### ◎岡本綺堂の略歴（河出文庫、綺堂随筆「江戸のことば」による）

明治 5 年 10 月 15 日高輪泉岳寺畔に生まれる。この年太陽暦に改められ、12 月 3 日を以て 6 年 1 月 1 日とする。

父は幕臣であり、明治元年奥州白河に戦い弾丸に傷つけられ横浜の居留地に潜伏し、英国商人の紹介により英国公使館のジャパニーズライターに雇われる。

明治 14 年（10 歳） 父から漢詩を、叔父から英語を学ぶ。

明治 17 年（13 歳） 東京府立中学入学。藩閥政府全盛時代で立身の望みなしと感じる。

明治 19 年（15 歳） この年朝野の政治家、学者、実業家を網羅する演劇改良会が興り、それらに刺戟され劇作家になろうと決心し、演劇に関する書籍を読み、各劇場へ立見に行く。

明治 23 年（19 歳） 東京日々新聞社に見習記者として入社

明治 27 年（23 歳） 日清戦争開戦、編輯多忙をきわめる。

明治 35 年（31 歳） 自作の戯曲「黄金鯰」を歌舞伎座で上演。世評芳しからず。

明治 37 年（33 歳） 日露開戦。新聞社より従軍記者たるべく命ぜられ 7 月に東京出発。9 月 3 日に遼陽城外に到着、10 月 3 日同道の従軍記者川島順吉君砲弾に中りて死す。岡本も小銃弾に帽子を撃ち落とされど、幸に恙なきを得たり。そのあいだにも露営二回、小豆のみを食して飢を凌ぎたること一日依然として通信に忙がわし。

十一月に入りて東京の本社より社長更迭の通知を受く。東京日日新聞社の経営は伊藤巳代治男より加藤高明子に移れるなり。果して社内に異動ありたれど、岡本等は依然在社することとなる。

明治 39 年（35 歳） 文士劇若葉会は東京毎日新聞社の経営となりて、東京毎日新聞演劇会と改む。その関係より東京日日新聞社を辞して、東京毎日新聞社に移る。

明治 42 年（38 歳） 三月中に「修善寺物語」を書く。

明治 44 年（40 歳） 明治座にて「修善寺物語」を上演し、左団次の夜叉王、好評。

大正 5 年（45 歳） 六月「半七捕物帳」を起稿し、翌年三月までに全編七回成る。

大正 6 年（46 歳） 十月「半七捕物帳」の続稿を起稿し、翌年四月までに六回成る。

大正 8 年（48 歳） 一月、帝国劇場の囑託を受けて、大戦後の欧米劇界視察の途に上ることに決定す。二月横浜を出帆。桑港等を経て三月三十日紐育着。五月六日倫敦着。六月八日巴里着。二十三日、再び倫敦に帰着。八月二十六日帰京。十一月、帝国劇場のため

に「戦の後」二幕を書く。

- 大正 12 年 (52 歳) 九月一日、大震災に遭う。市ヶ谷方面より燃え出でたる火は翌二日午前一時頃に至りて、麴町区元園町 (綺堂の実家) 附近に襲い来る。余震強くして、家財を持出すこと能わず、自宅は午前二時頃に類焼し、家財蔵書の類凡て灰燼に帰せり。
- 大正 13 年 (53 歳) 一月十五日、再度の強震に逢い、さなぎだに大破の家いよいよ頽れて、久しく居るに堪えず。三月、市外大久保百人町に移る。生れて初めての郊外生活なり。  
註) この年三浦老人昔話 12 編を大阪の新たな雑誌「苦楽」に発表する。
- 昭和 14 年 (68 歳) 三月一日、真昼の午後零時二十分、静かに逝く。

## ◎ 半七捕物帳

岡本綺堂作「半七捕物帳」はその後続出した各種の捕物帳の元祖と言われているが、大正六年一月号の「文芸倶楽部」掲載が初出である。江戸の基礎知識は幕臣であった父の影響もさることながら、綺堂がかつて長患いした時に読み耽ったという「江戸名所図会」の存在も、その成立に影響を与えたようだ。この「江戸名所図会」は天保七年 (1836) に完成した江戸の総合的な地誌として広く知られているが、彼はここに描かれた江戸の姿を面白く現代に紹介する方法はないかと思案、その結果、「半七捕物帳」にその答を見出したと伝えられる。

先の第一作“お文の魂”以来、昭和 12 年二月号の「講談倶楽部」掲載の“二人女房”に至るまで、実に六十九編に及んだ。

半七が取扱った事件を年代別に見ると、半七の養父吉五郎取扱事件五件を除くと、一番古いのが天保十二年 (1841 年) 七月の“大阪屋花鳥”で当時半七は十九歳。最後が慶応三年 (1867 年) 八月初めの“筆屋の娘”半七、四十五歳のことである。

### ○江戸と町奉行所

よく大江戸八百八町という言葉が使われるが、明治四十年に東京市で編纂した東京案内によると、天保十四年 (1843 年) には一七三一町があり、これらの町々に住んでいた庶民の数は 596488 人 (出稼ぎ人共) にも及んでいたとのこと。しかもそれ以外に、当時の大名やその家臣、旗本など武士の数は 50~70 万人ともいわれており、そのほか僧侶や神官等を含めれば 140 万人前後が江戸市中の総人口というのが定説になっている。ところで、武家地や寺社地には町名がなかったということ、つまり今見た町々は、すべて庶民の住んでいた所を指していたのである。しかも当時の江戸市域の 60% を占めていたのが武家地であり、残りの 20% が寺社地、同じく 20% が庶民の町方にしかすぎずこの狭い地域に 60 万人がひしめき合って生きていたわけである。さて、江戸に散在していた町々、またそこに住む庶民を支配していたのが町奉行所であった。町奉行所は南北二か所に分かれており、南町奉行所は数寄屋橋門内 (いまの有楽町駅の南部一帯) に、北町奉行所は呉服橋門内 (いまの東京駅北部辺り) に位置して一か月交代で勤務、月番の町奉行所では一般の訴訟を受付けるほかに、当月に起こった事件の解明に当たり、また月番の終わった後も前月に受付けた各種事件等の処理を行った。それぞれの町奉行の下には二十五人の与力がいて諸般の事務を担当、その下には各係ごとにそれぞれ数人の同心を配置していたのだが、これが計百二十人。つまり両町奉行所を合わせても与力は五十人、同

心は二百四十人に過ぎなかった。

これとは別に、江戸市民全体の中から選ばれた以下の自治組織があった。

- ・町役人（ちょうやくにん）
- ・自身番と木戸番
- ・町廻りの同心
- ・岡っ引き

これらの職務の詳細は省く。

この項は、今井金吾著「半七は実在した」河出書房新社による。

○資料として「小伝馬町牢屋敷」と公事方御定書「刑罰の図式」を添付します。

○前置きが名が長すぎました。すみません。

「半七捕物帳」を読んで感じたこと。

文章は平明で非常に読み易いのですが、知らない言葉が多く、辞書を引く回数が増えた。

例) 草双紙、貸本屋、さなぎだに、山祝等々

綺堂の江戸時代の風俗、習慣、法令や、町奉行、与力、同心、岡っ引などの豊富かつ正確な知識はどこでどうやって仕入れたのか？

最後に私の一押しは、広重と河瀬です。どのアンソロジーにもなぜか取り上げられていませんが、広重の名所江戸百景 深川洲崎十万坪の大判錦絵に想を得たと思われる作品です。